DAITO ARCHIVES NEWSLETTER Vol.2

大東文化歴史資料館だより

2007. 5. 31

大東文化歴史資料館の役割

学校法人大東文化学園理事長　**國岡　昭夫**

私立学校にとって存在の豊かさを実感させることが出来るのは、「建学の精神」を基にした教育が今日までどの様に行われ、成果をあげて来たかによる。しかし長い歴史の中にはいい時ばかりではない、そこには光と影、表と裏が混在する。それらを含めて、正確な記録保存館であって欲しい。時代は古くなるとよくなるもの、ともすれば古きよき時代の波に押し流れやすい。

資料館の存在は未来に繋がるものであって、はじめて大きな意味をもつ。過去は過去のことだといって、片付けてしまえば、それによってわれわれは未来をも放棄してしまうことになる。この危機意識が乏しくならない礎の役目を果す資料館であって欲しい。

新入生の皆さん、板橋キャンパスに来ましたら先ず歴史資料館に立ち寄り、先人の足跡を振り返り、大東文化学園のメンバーの一人として士気を高揚してください。

校歌にみる時代の風

大東文化大学第一高等学校長　**中村　勤**

このところ、大学の校歌を聞いたり口ずさんだりする機会が多い。この校歌について長く解けないナゾのようなものがあった。学園に奉職してほどなく作詞が谷鼎先生であることを知った。先生と呼ぶのはほかでもない。私自身 10 代後半、予備校に通っていたとき古文を教わった講師が谷鼎先生。御歳 50 代半ばだった思う。熱意溢れる円熟した授業風景が淡い記憶として残っている。1959（昭和 34）年のことである。

校歌は通例、創立に合わせて作られる。学園の創立は 1923（大正 12）年。だとすれば、“流れはとおし東洋の古き鑑を温ねては”ではじまる校歌を当時 20 代の谷先生が作詞されたことになるのか？かねてより心にわだかまっていた靄(もや)を晴らそうと、第３回企画展「シンボル誕生」を覗きに資料館に足を運んだところ、たちまち、歴史知らずの不埒な想像であることに気づかされた。現校歌の元は、時代の流れによって当初の学院歌に代わり、1953（昭和 28）年 9 月 20 日、大学創立 30 周年を記念して発表されたものだという。『もはや戦後ではない』といわれた時代に、この詞は建学の理念を幾重にも織り込み謳いあげている。1960（昭和 35）年この作詞者は不慮の事故により急逝された。鎮魂の気持ちをもこめ、荘重な詞をあらためて心に刻んでおきたい。

第一高校の校歌は開校二年目の 1963（昭和 38）年に作られた。作詞作曲とも、作曲家音楽評論家の堀内敬三氏。≪亡びし過去の夢をすてて≫。この冒頭のフレーズにみられる鮮烈な時代認識とその後に続く詞の平明さにに驚いた。由来をひもとくと「堀内氏は戦後の新しい世の新しい人造り教育に関心をもっておられ、……校歌の第一節の起句“亡びし過去の夢をすてて”は、氏のそういう気持ちが、新たに起こる大東文化に結びついて出たものと思われる」（第一高校創立 20 周年記念誌より）とある。そして、三番の《仰げば富士と秩父連山　流れは澄みて荒川清し》。堀内氏は、建設されて間もない校舎の屋上から四方を眺望した。その目に映じたのは、視界を遮るモノのない、当時の志村西台の原風景（徳丸が原）である。

学園史が個人史と偶然重なりあう時、記憶は一層鮮やかによみがえる。が、私たち多くの学縁者にとって、折々のエポックメーキングなドキュメントに立ち会う機会は稀だ。アーカイブスには学園の歴史を物語る貴重な記録や文献が収集されていく。その役割は、そこを訪れる者たちが、単なる懐旧に留まらず、学園の先人の営みと紛れなき史実、光と影に目を注ぎ、学ぶべき教訓を汲み取り、いまの位置を確かめるなかで、未来の学園と自らのあるべき進み行きを考える機会を提供するものであってほしい。

学園関係者聞き取り調査

大東文化歴史資料館・大東アーカイブスでは、創立百年史編纂事業の開始に先駆けて、学園関係者の聞き取り調査（インタビュー）を開始しました。これは、卒業生をはじめとして、過去に本学で教鞭を執られた先生方や学校経営・管理を行われた職員の方々など、これまで付設校を含む大東文化学園に関わってこられた多くの皆さん方の貴重なお話を記録し、後世へ残していこうという活動です。

第１回目の聞き取り調査は、神戸在住の田中稔さん（昭和 19 年本科二部卒業）にお願いをし、2006（平成 18）年３月 14 日、ホテルクラウンプラザ神戸に於いて行いました。

第１回聞き取り調査報告　田中稔先生をお訪ねして

今回、第１回目となる聞き取り調査を快く引き受けて下さった田中稔先生のお話を伺うべく、藏中しのぶ歴史資料館運営委員（外国語学部日本語学科教授）と二人、早春の神戸を訪れました。

田中先生は、漢学を専門としつつ近代史の分野まで幅広く研究されている方で、無窮会の紀要『東洋文化』にも、現在まで幾つもの論稿を発表されています。また、長年にわたり高校で教鞭を執られてこられ、今も現役の予備校講師をなさっています。神戸出身の藏中委員とは旧知の仲ということもあり、今回のインタビューに際して大東文化学院在学時代の思い出を事前に綴ってわざわざ当日持参して下さるなど、きめ細やかなご配慮をいただきました。

第１回目のインタビューということで、とにかく自由にお話くださいとお願いしましたが、田中先生のお話は、“どうして大東文化学院への進学を選んだのか”といったことから始まり、学院時代にお世話になった恩師の心に残る言葉や学院時代に学んだこと、数多くの大東文化学院出身の方々との出会いと別れなど、多岐にわたるとても興味深い内容でした。特に、田中先生は戦禍の最も激しくなった時期の入学だったことから、臨時非常措置によって修業年限の短縮を余儀なくされたというご経験をお持ちでした。戦時下の教育体制の変化が現場において、特に学びを求めて進学した学生に対し具体的にどういった影響を与えたのか、まさに当事者からお話を伺えるまたとない機会となりました。

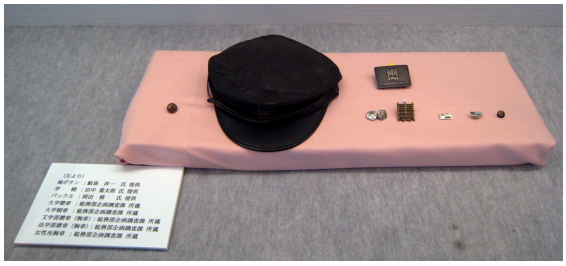
今回伺うことのできたお話から、大東文化の歴史としてはもちろんのこと、同時にこの一つの事例を通して日本の高等教育史の一側面を明らかにするといった意味においても大きな成果を得ることができたと思います。また、田中先生からは、大東文化学院出身で田中先生の恩師にあたられる森戸馨先生の追憶集『留魂録』や、ご自身の卒業証、教員免許状をはじめとした貴重な品々をご寄贈いただきました。ご協力くださった田中稔先生には、この場を借りて改めて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

（大東文化歴史資料館　浅沼 薫奈）

～大東文化学園に関する史資料を集めています～

・写真や映像　・各種機関誌や新聞　・講義ノート　・書簡類
・記念品（卒入学時のものや部活動サークル関連のものなど）
・学生時代の制服制帽　・学校行事や学生生活に関する資料　等

大東文化歴史資料館では、上記のようなもののほか、各種学園関係資料を探しています。本学を卒業された方、かつて教鞭をとっていらした先生方や退職された職員の方々、そのほか関係者の皆様のご協力を広くお願いしています。ご提供いただけるものや情報がございましたら、大東文化歴史資料館へ是非ご連絡ください。



大東アーカイブス第三回企画展

「シンボル誕生」～校歌・学生歌・校章～

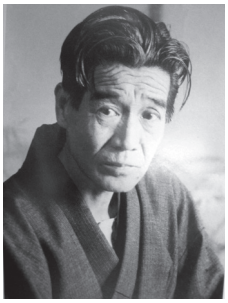
展示期間：平成19年4月2日（月）～ 9月25日（火）
（開室時間 毎週月～金曜日 9:30 ～ 16:30）
展示場所：板橋校舎2号館1階 大東文化歴史資料館展示室

「校歌・学生歌」原音
（マスターテープ）

今回の企画展では、学びの窓を同じくする「大東生」にとって忘れることのできない「校歌・学生歌・校章」をテーマとしました。

大東文化学院時代から現在まで、大東文化大学、第一高等学校、青桐幼稚園、大東医学技術専門学校に学ぶ「大東生」は、それぞれ建学の精神を歌に託して校歌・学生歌を歌い継ぎ、シンボルとして校章を帽子や制服などに身につけてきました。校歌・学生歌・校章は、在校生と卒業生とが「大東文化」への思いを等しく共有するための大切な役割を果たしてきたのです。

今回の「シンボル誕生」では、多くの方々からご寄贈いただいた大東ゆかりの制服・学帽・襟章などを展示しているほか、校歌・学生歌の誕生経緯などを紹介しています。



谷鼎（校歌作詞者）とその著作について

現在の校歌は、旧校歌（学院歌）に代わり、1953（昭和28）年に制定されたもので、作詞者は本学で教鞭を執る傍ら、歌人・窪田空穂に師事して歌人としても活躍した谷鼎（たに・かなえ 1896 ～ 1960年）である。谷の著作は、今回展示している『岩波講座日本文学 藤原定家』（1931年）や『古今和歌集評解』（有精堂、1955年）をはじめとする古典文学研究書と歌集に大別される。展示された書籍を目の前にしてみると、谷が当時の教授会から校歌の作詞を委嘱されたこともよく理解できる。谷は在職中の1960（昭和35）年、突然の輪禍のため急逝したが、この年に作られた「通勤」と題する連作短歌の中には、本学を歌った次のような1首がある。

学生らすでに待ちおり教卓に位置たしかめて先づおく鞄

（歌集『松籟』［近代詩歌社、1963年］所収）

なお、谷鼎の出身地である神奈川県秦野市の市立図書館には、その生涯にわたっての業績を著作や遺品から紹介する「谷鼎コーナー」が設けられていることも付言しておきたい。

（英米文学科専任講師・歴史資料館運営委員会委員　宮瀧交二）

「学生歌」と児玉花外

大東文化学院（大東文化大学前身校）の学生歌を作詞したのは、児玉花外（1874 ～ 1943年）である。花外は、「白雲なびく駿河台…」ではじまる明治大学校歌の作詞者としても知られている人物であり、明治から昭和初期にかけて活躍した社会主義詩人グループの一人として数えられている。

本学の学生歌を作詞した正確な時期は不詳であるが、おそらく昭和初期の1930（昭和5）年前後のことであったと思われる。初期の花外の作品は、キリスト教社会主義の立場から権力への反抗や貧富の差への憤りをテーマとしていたため、その詩歌集は政府によって発禁処分を受けるなど、不遇の時代を長く送らねばならなかった。そのような中で、神楽坂の粗末な下宿に身を寄せていた花外は、当時九段にあった大東文化学院の教員や学生らと交流を持つようになった。大東文化学院の学生と何度も酒を酌み交わす中で、彼らの情熱に動かされ、大東文化学院の学生歌が生まれたという。

なお、花外は1925（大正15）年～ 1930（昭和5）年の間、数回にわたり雑誌『大東文化』にも詩歌を発表している。同時期は花外にとって詩作数の激減期にあたるため、貴重な発表作品と言える。

（大東文化歴史資料館　浅沼薫奈）

「大東文化歴史資料館」館名揮毫について

私が昨年総務部長で歴史資料館事務室長を兼務していた時の運営委員会において、オープンした資料館展示室入口に館名を設置するに当たり、やはり「書道」の大東文化であるので筆書で掲げることが決定し、その書者の選定については、私に一任されました。
早速、本学卒業生〔大－10－中〕で現在書道学科教授・書道研究所所長である田中裕昭〔節山〕先生に館名揮毫をお願いした所、お忙しい中、快く引き受けて頂きました。

筆書して頂いた館名は、本学園の長い歴史を包含するような豊かな筆勢の楷書体で、これから資料館のシンボルとなる事でしょう。

田中先生の書は中国清時代の張廉卿、明治時代の宮島詠士、師である上條信山の影響を受けて楷書体が基調となっておりますが、近年行書・草書・隷書体へ移行した新しい境地の作品展開もされております。今回の資料館名は、そういう書活動をとおしての先生のお人柄がよく表れた作品であると拝察致しました。改めてここに御礼申しあげます。

（学校法人大東文化学園　常務理事・事務局長　歴史資料館運営委員　政池　芳博）

～ 田中裕昭〔節山〕先生紹介 ～

昭和 14 年長野生。大東文化大学中国文学科卒。
現在 大東文化大学文学部書道学科教授。大東文化大学書道研究所所長。
日展会員。読売書法会常任理事。謙慎書道会副理事長。

【大東アーカイブス活動記録】（2006年11月～2007年3月）

11. 2　ニューズレター編集会議。
　　校史編纂部会・展示部会会議。
　　合同部会会議。
11. 15　ホームページ更新会議。
11. 17　東海大学学園史資料センターを視察訪問。
11. 21　愛知大学展示講演会参加。（於：パシフィコ横浜）。
11. 22　寺﨑昌男氏より図書寄贈。(計332点)。
12. 9　展示部会会議。
　　歴史資料館運営委員会会議。
　　桑原淳氏より資料寄贈。（計５点）。
1. 24　ニューズレター第１号、創刊。
1. 25　全国大学史資料協議会東日本部会・研究会開催。（於：大東文化大学）。全国大学史資料協議会東日本部会会員校、大東文化歴史資料館来館・見学。
2. 19　合同部会会議。展示部会会議。
3. 8　秦野市立図書館を谷鼎関係資料調査のため訪問。
3. 9　大東医学技術専門学校を臨床検査科閉鎖にともなう物品受け入れのため現状調査。
3. 13　神戸女学院史料室を視察訪問。
3. 14　田中稔氏（昭和19年９月卒業）を聞き取り調査のため訪問。（於：ホテルクラウンプラザ神戸）。
　　田中稔氏より資料寄贈。（計８点）。
3. 15　全国大学史資料協議会東日本部会・研究会参加。（於：日本大学）。
3. 20　田中重太郎氏より資料寄贈。(計５点)。
3. 22　辻野史朗氏より資料寄贈。（計１点）。
3. 29　展示室次回（第3回企画展）展示品入れ替え作業のため閉室。（～31日）。
3. 31　小野幸二氏より資料寄贈。（計１点）。
　　岡田脩氏より資料寄贈。（計22点）。

大東文化歴史資料館だより
第２号
DAITO ARCHIVES NEWSLETTER Vol.2

発　　行：2007 年５月 31日
編集発行：大東文化歴史資料館
〒175-0083 東京都板橋区徳丸 2-19-10
TEL 03(5399)7646 / FAX 03(5399)7647
URL：http://www2.daito.ac.jp/jp